

母親であることについての女性の自己意識

— 自己受容感と自己拒否感に関する調査 —

小林 真・渡辺 亜矢*

Women's self consciousness as a mother:
Survey on feeling of self acceptance and self rejection.

Makoto KOBAYASHI and Aya WATANABE

e-mail : kobamako@edu.toyama-u.ac.jp

キーワード：母親，自己受容感，自己拒否感

Key words : mothers, self acceptance, self rejection

問題と目的

Rosenfield (1989) は、女性が男性に比べて悩みや抑うつ傾向が高いのは、家庭内で意志決定に関わる機会が少ないことと、就労している場合には職業と家事・育児といった多くの役割を兼務するために負荷が過剰になっているためだと述べている。これに対して小林 (1996) は、日本において3歳児を持つ母親を対象に就労意識と抑うつとの関連を調査した。その結果、就労したいのに専業主婦をしている女性や、主婦でいたいのに就労している女性に抑うつ傾向が見られることを報告している。つまり、就労している女性が職業と家事・育児を両立させるために負担が過剰になっていることよりも、自分の望む生き方ができていないために抑うつ状態になるのだと考えられる。さらに菅原 (1997) は現代の若い母親の家庭生活や育児に関する意識を調査し、生活面の様々なことに不満を抱いている女性がいることを報告している。生活不満層と名付けられた女性たちは、夫とのコミュニケーションが希薄で、夫との関係に満足していない。このタイプの女性はまた、子どもに対しても不満が多く、子どもの存在に意義が見いだせないと感じている。このように母親が自分の生き方に不満を持ち、抑うつ的になっていると、子どもとの愛着形成が阻害されるという報告がある (Jouriles & O'Leary, 1990)。

氏家 (1996) は子ども時代の母親の記憶と母親になってからの親としての態度の関係を調査し、子ども時代に母親に対してネガティブな記憶を持っていると、自分の子どものポジティブな部分には目を向けにくく、ネガティブな部分を見てしまいがちと述べている。さらに自分の子どもに虐待をしてしまう母親の事例を取り上げ、父親が自分をよくからかっ

て脅かしていたこと、両親の間でケンカが多かったという記憶について紹介している。久保田 (1995) は大学生を対象に、子どもの頃・思春期・現在の母親に対する認識と現在の対人関係との関連性を調査した。その結果、過去から現在にわたって母親との関係について愛着や敬愛の気持ちを持ち、母親に対する不信感や拒否感がない場合には、現在の他者との関係が安定していることを見出している。このように、母親が自分の両親とどのような関係を築いてきたかが、その後の子どもとの関係構築に影響を与えているものと思われる。

佐藤・菅原・戸田・島・北村 (1994) は、母親が育児の際に感じるストレスには母親を取りまく人間関係に由来するものと、かんしゃくを起こしたりなだめにくいといった子どもの特徴に由来するものがあると述べている。また Brockington (1996) は臨床的な報告を展望して、乳児が泣き続けたり入眠や授乳が困難であるといった子どもの特徴のために親近感が築けないケースがあると述べている。このように、子どもの気質的な特徴によっても母親の意識が変わってくることも示唆されている。

本研究では、幼児を持つ母親の自己意識を自己受容感と自己拒否感という2つの側面からとらえる。そして、受容感と拒否感の違いが母親の子ども時代の親子関係や現在の家族関係、子どもの気質などの諸変数とどのように関連しているのかを検討する。

方 法

被験者 富山市および高岡市に在住する乳幼児を持つ母親153名 (年齢範囲19歳～43歳, 平均29.5歳)。

手続き 質問紙調査を実施した。富山市の母親については

* 高岡市戸出保育園

4ヶ月健診時に母親に質問紙を渡し、後日郵送によって回収した。配布122名に対して回収68名(回収率55.7%)であった。高岡市の母親については、4つの育園の3歳未満児クラスにおいて担任保育者を通じて質問紙を配布・回収した。配布96名に対して回収85名(回収率88.5%)であった。

質問項目の構成 質問紙はフェイス項目、母親であることについての自己受意識に関する項目、子ども時代の両親についての印象、現在の家族関係についての印象、子ども・育児についての印象、子どもの特徴からなる。

フェイス項目として母親の年齢、出産回数、母親のきょうだいの有無、子どもの性別、子どもの年齢を尋ねた。自己意識については大日向(1988)を参考に、受容感と拒否感を表すと思われる項目を4項目ずつ作成した。自己受容感と関連すると思われる諸変数については、遠藤・江上・鈴木(1991)を参考に、育児に関する精神的および実質的サポートを問う3項目、母親の生育歴8項目(父親との関係、母親との関係、子ども時代の家庭の雰囲気、近所づきあいなど)、現在の家族関係16項目(現在の両親との関係、夫との関係、経済的状況など)、育児や子ども一般についての感情10項目、子どもの心身の特徴9項目、妊娠・出産時の様子5項目を作成した。ソーシャルサポートについては、いる・いないの2択で回答を求め、それ以外の項目はよくあてはまる(5点)～全くあてはまらない(1点)の5件法で回答を求めた。

結 果

調査内容の因子分析結果 母親としての自己意識、生育歴、現在の家族関係、育児や子ども一般についての感情、子どもの心身の特徴、妊娠・出産時の様子といった調査内容の潜在構造を探るため、それぞれの調査内容ごとに因子分析を実施した。因子分析はいずれも主因子法で行い、固有値1の規準で因子を抽出した後でvarimax回転を実施した。調査内容ごとの因子分析結果をTable 1～6に示す。

Table 1に示されたように母親としての自己意識は2つの因子からなり、項目間の整合性は $\alpha=.830\sim.647$ で累積寄与率は50.93%であった。第1因子は自己受容感、第2因子は自己拒否感と命名された。自己受容感と自己拒否感という2因子が抽出されたことから、受容感と拒否感は一次元構造の対極に位置するものではなく、異なった次元であるといえる。

Table 1 母親としての自己意識 (varimax 回転後)

No. 項目の内容	F 1	F 2	h^2
第1因子：自己受容感 ($\alpha=.830$)			
Q05 母親であることに充実感を感じている	.863	-.116	.758
Q01 母親であることが好きである	.834	-.268	.767
Q03 母親になったことで人間的に成長できた	.679	.032	.462
Q08 子どもがいない方がいいと思うことがある	-.589	.330	.456
Q07 母親になったことで気持ちが安定した	.496	-.321	.349
第2因子：自己拒否感 ($\alpha=.647$)			
Q04 母親であるために自分の行動がかなり制限され残念だ	.051	.706	.501
Q02 子育てが不安に感じられる	-.288	.671	.533
Q06 自分は母親として不遜格なのではないかと思う	-.176	.464	.246
固有値	2.612	1.463	
寄与率(累積寄与率)(%)	32.65	18.28	(50.93)

Table 2に示されたように生育歴は2因子からなり、 $\alpha=.843\sim.830$ 、累積寄与率は59.13%であった。第1因子は暖かい母親像、第2因子は暖かい父親像と命名された。Table 3に示されたように現在の家族関係は3因子からなり、 $\alpha=.879\sim.811$ で、累積寄与率は50.55%であった。第1因子は両親との不仲、第2因子は夫の協力、第3因子は夫婦のすれ違いと命名された。Table 4に示されたように育児・子ども一般についての印象は3因子からなり、 $\alpha=.916\sim.830$ 、累積寄与率は72.65%であった。第1因子は育児の楽しさ、第2因子は育児の煩わしさ、第3因子はもとからの子ども好き傾向と命名された。Table 5に示されたように子どもの心身の特徴は3因子からなり、 $\alpha=.589\sim.306$ 、累積寄与率は45.48%であった。第1因子は寝つきの悪さ、第2因子は1項目だけなので接触を好む傾向、第3因子は大人とのよい関わりと命名された。Table 6に示されたように、妊娠・出産時の様子は2因子からなり、 $\alpha=.466\sim.081$ 、累積寄与率は24.77%であった。第1因子は健康面での気がかり、第2因子は出産希望・新生児との接触と命名されたが、第2因子は固有値.249、 $\alpha=.081$ であることからわかるように、この因子は心理尺度としては全く意味をなさないもので、以下の分析には用いない。

Table 2 子ども時代の両親についての印象 (varimax 回転後)

No. 項目の内容	F 1	F 2	h^2
第1因子：暖かい母親像 ($\alpha=.849$)			
Q09 子どもの頃、私の母は私をよくかわいがってくれた	.829	.391	.840
Q11 昔、私の母は冷たかった	-.682	-.279	.543
Q10 子どもの頃、私はよく母に甘えた	.675	.148	.478
Q15 私の母は子ども好きである	.628	.405	.558
第2因子：暖かい父親像 ($\alpha=.830$)			
Q12 子どもの頃、私の父は私をよくかわいがってくれた	.254	.817	.732
Q13 昔、私の父は冷たかった	-.233	-.789	.677
Q16 私の父は子ども好きである	.308	.611	.468
Q14 子どもの頃、よく家族でいろいろなおしゃべりを楽しんだ	.417	.509	.433
固有値	2.390	2.340	
寄与率(累積寄与率)(%)	29.88	29.25	(59.13)

Table 3 現在の家族関係について (varimax 回転後)

No. 項目の内容	F 1	F 2	F 3	h^2
第1因子：両親との不仲 ($\alpha=.879$)				
Q31 現在私の母親は冷たい	.885	-.221	.263	.901
Q32 現在私の父親は冷たい	.800	-.227	.275	.767
Q29 母は私のよき相談相手である	-.743	.199	-.174	.622
Q30 私は自分の母のような母親になりたい	-.669	-.009	-.090	.497
Q26 夫は病気がちである	.462	-.335	.433	.513
第2因子：夫の協力 ($\alpha=.849$)				
Q22 夫は子どもとよく遊ぶ	-.161	.915	-.202	.904
Q23 夫は子育ての手伝いをしてくれる	-.122	.809	-.303	.761
Q21 夫は子ども好きである	-.230	.752	-.236	.674
Q28 育児や家事の協力者がいない	.163	-.402	.352	.312
第3因子：夫婦のすれ違い ($\alpha=.811$)				
Q20 夫が私に関心を払ってくれない	.291	-.347	.679	.666
Q17 私たち夫婦はお互いによく理解し合っている	-.070	.271	-.597	.435
Q19 性生活に不満がある	.281	-.289	.590	.511
Q18 私たち夫婦は子育てについて意見が一致している	-.195	.444	-.571	.561
Q24 夫は留守がちである	.060	-.359	.418	.469
Q27 夫の家族と折り合いが悪い	.368	-.218	.380	.327
Q25 経済的に不満がある	.189	.007	.365	.169
固有値	3.138	3.123	2.627	
寄与率(累積寄与率)(%)	19.61	19.52	16.42	(50.55)

Table 4 育児・子ども一般についての印象 (varimax 回転後)

No. 項目の内容	F 1	F 2	F 3	h ²
第1因子：育児の楽しさ(α=.916)				
Q39 お子さんを思わずなでたり、ほおずりしたりすることがよくある	.946	-.141	.102	.926
Q40 「いないいないばあー」等、お子さんと遊ぶことがよくある	.877	-.120	.167	.811
Q38 授乳やおむつ替えの時お子さんに話しかけることなどがよくある	.799	-.110	.152	.674
Q33 お子さんのお乳などを吐くと汚いと思う	-.700	.390	-.113	.655
Q36 汚れたおむつ・パンツを換えることは汚いと思う	-.617	.398	-.265	.610
第2因子：育児の煩わしさ(α=.860)				
Q34 お子さんに泣かれて夜中に何度も起こされることはわずらわしい	-.178	.896	-.092	.844
Q35 夜中のおむつ替えや授乳などはわずらわしい	-.274	.860	-.097	.825
Q37 お子さんがむずむずして泣いてばかりいるとうるさく思う	-.105	.612	-.274	.460
第3因子：もとの子ども好き傾向(α=.830)				
Q41 私は、もともと赤ちゃんや子どもが好きである	.205	-.113	.897	.860
Q42 私はずっと以前から、早く自分の子どもが欲しいと強く思っていた	.147	-.217	.730	.601
固有値	3.356	2.335	1.575	
寄与率(累積寄与率)(%)	33.56	23.35	15.75	(72.66)

Table 5 子どもの心身の特徴 (varimax 回転後)

No. 項目の内容	F 1	F 2	F 3	h ²
第1因子：寝つきの悪さ(α=.589)				
C01 現在夜泣きをすることがあります	.986	-.038	.154	.998
C02 昼間寝てばかりいて、夜起きていることがあります	.484	.172	.224	.314
第2因子：接触を好む傾向				
C04 抱かれたり、さわられたりすることは好きですか	.042	.892	.057	.801
第3因子：大人とのよい関わり(α=.306)				
C05 喜怒哀楽などの表情を示すことはありますか	-.027	.130	.593	.369
C06 大人が相手になって遊ぶと喜びますか	.142	.265	.281	.170
C03 毎日の食事時間は規則的ですか	.021	-.003	.276	.076
固有値	1.230	.914	.584	
寄与率(累積寄与率)(%)	20.51	15.24	9.73	(45.48)

Table 6 妊娠・出産時の様子 (varimax 回転後)

No. 項目の内容	F 1	F 2	h ²
第1因子：健康面での気がかり(α=.466)			
P04 新生児の体重(軽いほど得点が高い)	.652	-.042	.427
P03 出産は早産だったか	.628	-.210	.438
P05 健康についての心配はあるか	.412	.204	.211
第2因子：出産希望・新生児との接触(α=.081)			
P02 出産直後から新生児と同室だったか	-.001	.323	.105
P01 出産を希望していたか	-.014	.239	.057
固有値	.990	.249	
寄与率(累積寄与率)(%)	19.79	4.98	(24.77)

自己受容感と拒否感を持つ母親の特徴 Table 1 からわかるように、自己受容感と自己拒否感はそれぞれ独立した因子であった。そこで全ての回答に記入漏れのなかった125人を対象として、自己受容感と拒否感の因子得点の正負によって母親を4つのタイプに分類した。タイプIは受容感と拒否感が共に低い母親で、タイプIIは受容感が低く拒否感が高い母親、タイプIIIは受容感が高く拒否感が低い母親、タイプIVは受容感と拒否感が共に高い母親である。人数の内訳は、タイ

プI：30人、タイプII：31人、タイプIII：37人、タイプIV：27人であった。

それぞれのタイプの間で、母親の育った家族関係、現在の夫との関係、母親になる前に抱いていた子どもへの感情、現在の子どもの特徴がどのように異なるかを調べるため、4つのタイプを独立変数とし、因子分析で抽出された12の因子得点を従属変数とする多変量分散分析を実施した。その結果、Wilks' Λ=.390, F(42,309.28)=2.75(p<.001) で有意な多変量主効果が得られた。個別変量については8つの因子で有意な主効果が得られた。8つの因子における主効果は、暖かい母親像で F(3,117)=7.28(p<.001)、暖かい父親像で F=4.31(p<.01)、両親との不仲で F=12.16(p<.001)、夫の育児参加で F=3.14(p<.05)、夫婦のすれ違いで F=4.06(p<.01)、育児の楽しさで F=12.31(p<.001)、育児の煩わしさで F=4.18(p<.01)、もとの子ども好き傾向で F=5.62(p<.01) となった。

次にどのタイプ間に差が見られるかを調べるため、TukeyのWSD法による多重比較を実施した(α=.05レベル)。その結果、暖かい母親像に関しては、タイプI<タイプIII・IVという有意差が見られた。暖かい父親像に関してはタイプI・II<タイプIIIという有意差が見られた。両親との不仲に関してはタイプI>タイプII・III・IVという有意差が見られた。夫の育児参加に関してはタイプII<タイプIIIという有意差が見られた。夫婦のすれ違いに関してはタイプI・II>タイプIIIという有意差が見られた。育児の楽しさに関しては、タイプI<タイプII<タイプIII<タイプIVの順で、各タイプの間で有意差が見られた。育児の煩わしさに関してはタイプIII<タイプIVという有意差が見られた。子ども好き傾向に関しては、タイプII<タイプI・III・IVという有意差が見られた。有意な個別変量主効果の得られた8つの因子の、タイプごとの平均値をFigure 1に示す。

考 察

本研究ではまず、乳幼児を持つ母親の自己意識が自己受容感と自己拒否感の2つの構造からなることを明らかにした。次に2つの因子得点によって母親を4つのタイプに分類し、

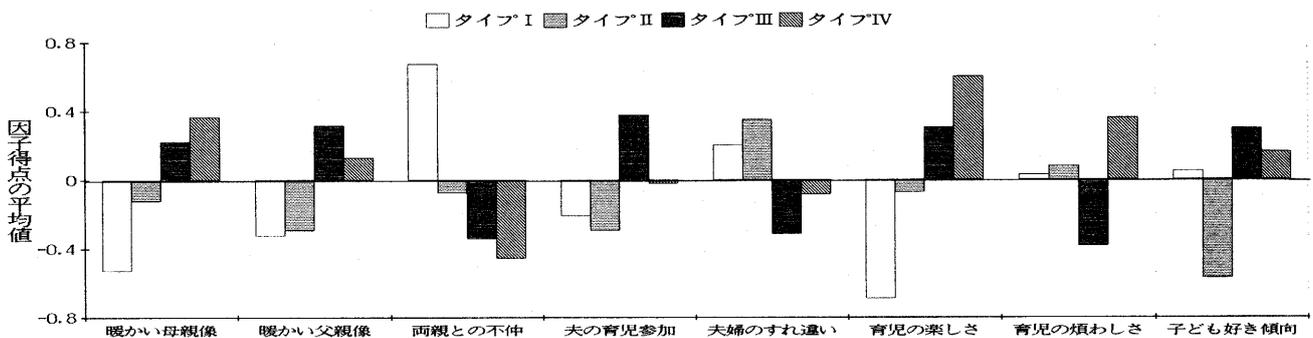


Figure 1 4つのタイプの母親の特徴

それぞれの特徴を探索した。

タイプⅠの女性は母親になったことに対する自己受容感も拒否感も低く、母親になったことそれ自体についての意識が弱い。このタイプの女性の特徴を見ると、幼少期の暖かい母親像と暖かい父親像が有意に低く、現在の両親との不仲は他の3タイプに比べて有意に高い。そして、夫は協力的ではなく夫婦のすれ違いも存在する。緒方(1996)はアダルトチルドレンに関する研究を展望して「家族から愛されずに育った人は、自分と同様に愛されずに育った人を配偶者を選び、お互いにその相手を愛することで、自分の気持ちを満足させる」傾向があると述べている。こうした夫婦関係はお互いを高め合う場合もあるが、お互いに蔑んで夫婦関係を歪めてしまう場合もあるという(緒方,1996)。数井・無藤・園田(1996)は、夫婦関係の調和性は女性が親となったときに感じる制約感・ストレスと高い負の相関があり、母子間の愛着の安定性と正の相関があることを報告している。こうした知見を踏まえると、本研究におけるタイプⅠの女性は、子どもとの情緒的な結びつきが不安定になりやすいといえる。

タイプⅡの女性は自己拒否感だけが低い女性である。暖かい母親像はタイプⅠとタイプⅢ・Ⅳの中間に位置しており平均的であるが、暖かい父親像は低いと感じている。現在の両親との関係は中程度である。夫の育児参加は有意に低く、夫婦のすれ違いも有意に高い。他の3タイプに比べて、このタイプの女性のみがもともと子どもが好きでなかったという顕著な傾向を示している。氏家(1996)は女性が出産して母親になる際に、途中のプロセスの違いによって自分を否定的に見るようになるのか、それとも初期状態に既に違いがあるのか、2つのモデルを提示している。本研究では、自己否定感を強く持つ母親にもともと子どもが好きでない傾向が高く見られた。したがって、これは母親としての自己拒否感を増大させるための危険因子として作用している可能性が考えられる。

タイプⅢの女性は自己受容感が高く拒否感は低いので、現状に対して最も適応している女性であるといえよう。このタイプは暖かい母親像も暖かい父親像も有意に高い。しかもこのタイプの夫は育児に協力的で夫婦のすれ違いは有意に低い。もともと子ども好きだったことは、母親としての自己意識の形成において危険度を下げる因子と考えらる。また夫婦間の調和がよいことは、子どもとの安定した愛着関係にも影響している(数井ら, 1996)。配偶者との良好な関係を築くことができ、子どもとの関係が安定しているために育児が楽しく感じられるのであろう。

タイプⅣの女性は自己受容感と拒否感が共に高い。このタイプの女性は、育児の楽しさが他の3つのタイプよりも有意に高いと同時に、育児の煩わしさも有意に高くなっている。また、暖かい母親像は有意に高かったが、暖かい父親像はタイプⅢとタイプⅠ・Ⅱの中間に位置し、平均的である。夫の育児参加と夫婦のすれ違いも平均的である。しかし両親との不仲は最も低いと、おそらく夫以外に精神的あるいは実質的なソーシャルサポートを受けることができるものと考えら

れる。したがって、このタイプはごく普通に母親業をこなしている女性であると考えられる。

4つのタイプの特徴を検討した結果、幼少期の両親の暖かさ、特に暖かい父親像は母親の自己受容感と自己拒否感の両方に関連していることが明らかになった。また、夫の育児への協力、あるいは夫婦のすれ違いも自己受容感・拒否感と関連していた。さらにもともと子ども好きであったかどうかという母親の抱えている暗黙の子ども観が、自己否定感を高める危険因子になる可能性も示唆された。本研究では4つのタイプの比較を行っただけで、調査で得られた諸変数から自己受容感と自己拒否感の程度を予測したり、4つのタイプを判別するような分析は行わなかった。したがって、今後はこのような回帰的手法を用いて、予測が成り立つかどうかを検討していく必要がある。

これらの結果を踏まえて、本研究では今後の子育て支援に向けて2つの提言を行う。まず第一に学校教育における教育内容の改善が挙げられる。家庭科が男女共修になってから、保育所や幼稚園などに中学生・高校生が出かけて子どもと触れあう機会が多くなってきた。これは、もともと子どもに抵抗感のある女性が子どもに慣れる機会を提供するばかりでなく、男性が育児に参加するためのよい学習機会になっていると思われる。男性が育児に協力的になり、自分の子どもとの間に暖かい情緒的な関係を作ることができれば、配偶者の母親としての自己受容感が高まるのである。したがって、保育の体験学習が男女の双方に有益な体験になるように最大限の配慮や工夫をすることが望まれる。

第二に、母子保健業務の改善である。近年は父親の育児参加を促すために、母親教室だけでなくパパママ教室(セミナー)などが開催されるようになってきている(中山,1997)。父親の育児参加は、子どもの社会性や知的発達に良い影響を与える(MacDonald & Parke, 1984; 土谷・飯長・加藤・数井, 1996)。さらに配偶者に対するサポートの機能も有している。したがってパパママ教室等の家庭支援の講座で、父母が共に子どもとの関わり方について学ぶことは、調和的な夫婦関係を作ることに寄与し、それが子どもの発達に良い影響を及ぼすと考えられる。Camara & Resnick (1988)は、夫婦間に対立が生じたときに父親が言語的に相手を威嚇する家庭の子どもは、学校などで向社会的行動が少なく問題行動が多いと報告している。また夫が妥協・調和的な解決を図る家庭の子どもは学校などでの攻撃行動が少ないことも報告している。現在のところ父親に子育てを教える機会はほとんどないため、こうしたパパママ教室などを利用しながら、夫婦で子育てについて話し合ったり協力する場を設けていく必要がある。

引用文献

- ブロッキンソン, I.F. 1996 岡野禎治 (監訳) 母性とメンタルヘルス 日本評論社 (Brockington, I.F. Motherhood and mental health. Oxford : Oxford University Press.)
- Camara, K.A. & Resnick, G. 1988 Interparental conflict and cooperation : Factors moderating children's post-divorce adjustment. In Hetherington, E.M. & Arasteh, J.D.(Eds.) *Impact of divorce, single parenting, and stepparenting on children*. Hillsdale : Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- 遠藤利彦・江上由美子・鈴木さゆり 1991 母親の養育意識・養育行動の規定要因に関する探索的研究 東京大学教育学部紀要, 31, 131-152.
- 緒方 明 1996 アダルトチルドレンと共依存 誠心書房.
- ジュリレス, E.N. & オリアライ, K.D. 1990 親の気分がその行動に及ぼす影響 ブレックマン (編) 濱治世・松山義則 (監訳) 家族の感情心理学—そのよいときも, 悪いときも— 北大路書房 Pp.193-209. (Brechman, E. A. (Ed.) *Emotions and the family: For better or for worse*. Lawrence Erlbaum Associates.)
- 数井みゆき・無藤隆・園田菜摘 1996 子どもの発達と母子関係・夫婦関係—幼児を持つ家庭について— 発達心理学研究, 7, 31-40.
- 小林 真 1996 母親の就労と抑うつに関する予備的研究 上田女子短期大学児童文化研究所所報, 18, 62-70.
- 久保田まり 1995 アタッチメントの研究—内的ワーキングモデルの形成と発達— 川島書店
- MacDonald, K. & Parke, R.D. 1984 Bridging the gap : Parent-child play interaction and peer interactive behavior. *Child Development*, 55, 1265-1277.
- 中山勘次郎 1997 父親はいつ父親になるのか 高野清純・新井邦二郎 (編著) モノセクシュアル時代の父親学 福村出版 Pp.42-73.
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店
- Rosenfield, S. 1989 The effects of women's employment : Personal control and sex difference in mental health. *Journal of Health and Social Behavior*, 30, 77-91.
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則 1994 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連 心理学研究, 64, 409-416.
- 菅原健介 1997 母親の5つのタイプ 山本真理子 (編著) 現代の若い母親たち 新曜社 Pp.18-49.
- 菅原ますみ 1996 気質 青柳肇・杉山憲司 (編著) パーソナリティ形成の心理学 福村出版 Pp.22-34.
- 土谷みち子・飯長喜一郎・加藤邦子・数井みゆき 1996 父親の養育行動の柔軟性と子どもの発達 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子 (編) 子どもの発達と父親の役割 ミネルヴァ書房 Pp.159-171.

氏家達夫 1996 親になるプロセス 金子書房

付記

本研究を進めるにあたり調査にご協力いただいた富山市中央保健センター, 高岡市児童福祉課, 並びに保育園の先生方と保護者の皆様に感謝します。

なお, 本研究のデータ解析はSPSS ver8.01Jを用いて行われた。また本研究の概要は, 日本教育心理学会第41回総会で発表された。